

## 悪魔の力の衰退

——レジナルド・スコット『魔術の暴露』(1584 年)——

菊地英里香

### はじめに

イングランドにおいて法律に基づき最初に魔女が処刑されたのは 1566 年であり、最後に魔女裁判が行われたのは 1717 年のことである。つまり、イングランドにおける魔女迫害はエリザベス 1 世(在位 1558–1603 年)の時代に始まり、ステュワート朝と共に終わる<sup>1</sup>。そのピークは内戦期であり、それに次ぐのがエリザベス朝とジェームズ 1 世(在位 1603–1625 年)の治世の前半である<sup>2</sup>。ジェームズ 1 世は自ら魔女裁判の被疑者の取り調べにあたり、『悪魔学』*Daemonologie*<sup>3</sup>(1597 年)という論考を著して魔女の取り締まりを訴えた。そして、ジェームズ 1 世がこの著書の中で名指しで非難した魔女懷疑論者の一人がレジナルド・スコット(1538–1599 年)である。スコットの著書『魔術の暴露』*The Discoverie of Witchcraft*<sup>4</sup>(1584 年)は、賛否両論を巻き起こし、後世の懷疑論者たちからは論拠とされる一方で、魔女狩りを進めようとする者たちからは激しい糾弾を受けた。

スコットはイングランド南東部ケント州の富裕な名士の家柄に生まれている。彼は敬虔なカルヴァン主義者であり、17 歳でオックスフォード大学に送られたが、学位を取得することなく生地に戻った。何らかの公職に就いたこともあったが、従兄弟のトマス・スコット卿の庇護の下、その屋敷を管理しながら学者たちに顧みられないような類の作家の作品を熱心に読み漁り、余暇を農業やガーデニングで過ごした<sup>5</sup>。

彼が本書を執筆した動機として、アングロは次の事柄を挙げている<sup>6</sup>。第一に、彼が

---

<sup>1</sup> イギリスの魔女狩りに関しては、浜林正夫『魔女の社会史』, 未来社, 1978 年が詳しい。なお 16, 17 世紀イングランドにおける魔術や民間信仰については以下を参照。キース・トマス『宗教と魔術の衰退 上・下』荒木正純訳, 法政大学出版局, 1993 年。

<sup>2</sup> 浜林正夫, 前掲書, p.31.

<sup>3</sup> King James I of England, *Demonology*, G.B.Harrison(ed), San Diego, The Book Tree, 2002, (Reprinted from the 1924 edition).

<sup>4</sup> Reginald Scot, *The Discoverie of Witchcraft*, with an introduction by the Rev. Montague Summers, New York, Dover, 1972.

<sup>5</sup> *ibid.*, xxiii–xxvi.

<sup>6</sup> S. Anglo, «Reginald Scot's Discovery of Witchcraft: Scepticism and Sadduceism», *Damned Art. Essays in the Literature of Witchcraft*, London, 1977, pp.106–139.

『ホップ園』 *A Perfect Platforme of a Hoppe-Garden* (1574 年) を出版した後の 10 年のあいだに魔術を原因とした告発がイングランドで頻発したため、彼自身裁判を目撃した可能性が高い。そのため、彼はそのような裁判で提示された証拠に関し、体系的に研究しようとしたのであろう。第二に、まさしく同時期に、魔女狩りに対する論争が大陸で盛んになっていたことが挙げられよう。魔女狩りに対する賛否双方の立場からさまざまな著作家たちが著作を発表していた。魔女狩りを推進しようとする法律家ボダンと魔女を悪魔の犠牲者でしかないとして救おうとする医者ヴァイアーの論争が起こったのもまさにこの時期のことである。また、サマーズも述べているように、法学の素養を身につけたスコットが、世に知られていない様々な著作家の書物を丹念に通読するに十分な時間的余裕のある暮らしを送っていたことも本書執筆を可能にした要因であっただろう<sup>8</sup>。

スコットの『魔術の暴露』は 16 篇から成り、さらに補遺「悪魔と霊についての言説」 *A Discourse upon divels and spirits*<sup>9</sup> が後年追加された。スコットは、当時知的な論争のテーマとなっていた悪霊や天使、悪魔的魔術、自然魔術といった事柄について、本書の中で首尾一貫した議論を展開する。彼は魔女裁判を推進する裁判官たちの偏見に嫌悪を催しながら彼らの手の内を見透かし、その論証の一貫性のなさと軽信を鋭く指摘する。その際、彼の武器となったのは、ホップ栽培によって培われたと思しき経験から物事を判断する態度と、キリストとその福音を重視する彼の信仰である。

本稿では、まずスコットにおける魔女像と魔術師像を把握し (I)、当時の論争において重要な問題となっていた聖書における魔術や魔女と関わる記述の解釈を分析し (II)、奇跡の終焉という確信のもとに悪魔と人間世界を隔絶しようとする彼の試み (III) を究明する。その際、彼に多大な影響を与えた魔女懷疑論の先達ヴァイアーの説との同異に着目することにより、スコットの特徴が浮き彫りになるだろう。彼の理論が後世から振り返っていかに革新的であったかを評価するのではなく、彼の思考の有り様をその時代の中においてより正確に位置づけることを目的としたい。

<sup>7</sup> G.Modestin, «Le gentleman, la sorcière et le diable :Reginald Scot, un anthropologue social avant la lettre ?», *Médiévales* 44, printemps 2003, p.149. モデスティンによれば、『魔術の暴露』刊行に先立つ約 6 年間、スコットは司法機構において活動していたという。

<sup>8</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Samers(ed.), xxvii.

<sup>9</sup> 本稿のテキストとしたサマーズ版にはこの補遺が収録されていないため、この部分に関してはニコルソン版を用いる。Reginald Scot, *Discoverie of Witchcraft*, Brinsley Nicholson(ed), London, 1886, repr. 1973.

## I 魔女と魔術師をめぐる議論

### 1.1 魔女像

スコットは第1の書、第3章で魔女像を以下のように描いている。

魔女と言われている者たちのひとつのタイプは次のようなものである。一般に年老いていて、不具で目がかすんでいて、青ざめた、不快なしわだらけの女たちである。彼女たちは貧しく、不機嫌で迷信深く、カトリック信者か無宗教である。そのような不純な精神は悪魔にとって格好の座となる。災害や不幸、中傷や虐殺が起こると彼女たちはまさしく同じことが自分たち自身にもできると簡単に確信させられてしまう。したがって、彼女らの心には強烈にして不変の想像が刻印されてしまうのである。彼女らは背が曲がり醜く、憂鬱で見る者すべてに恐怖を与える。彼女らはもうろくしていて口やかましく、狂っていて悪魔的である。悪魔憑きと言われている者たちさながらである<sup>10</sup>。

スコットの語る魔女は、一言で言うならば物乞いをする気違いじみた老婆ということになるだろう。そのような老婆たちが「魔女」に仕立てられていく過程を彼は的確に描写している。

この惨めで不幸な者たちはすべての隣人たちにとって不愉快であり、たいそう恐れられているが、あえて彼女らを害したり、彼女らのどんな願いも拒否したりする者たちもいた。そこで彼女らは彼らとけんかをし、人間本来の能力以上のことができる時々考えるのだ。彼女らはポットをミルク、そのような飲み物やポタージュのようなもので満たすためドアからドアへと〔物乞いに〕訪れる。こうしないと彼女らはほとんど生きていけなかった。〔……〕

多くの場合これは失敗に終わり、彼女らが懇願し借りている場所で彼女らの必要や

---

<sup>10</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed.), p.4.

期待は満たされることもかなえられることもなく、むしろその俗悪さが隣人たちによってたしなめられたのだった。魔女は隣人たちにとって忌わしくうんざりするものとなる。彼らはさらに彼女に嫌悪感を募らせ軽蔑する。こうして、〔彼女は〕しばしばある者を、そして別の者をというように呪うようになる。家の主人から彼の妻、子供、畜牛、そして豚小屋に寝そべっている子豚をもである。こうして時がたつにつれて彼らはすっかり彼女を不愉快にしたので、彼女は彼らすべてが不幸に見舞われるようにと願ったのである。おそらく呪いと冒瀆を含めて型にはまった言い方で言ったのだろう。（やがて）おそらく彼女の隣人たちが死んだり病気にかかったり、あるいは彼らの子供たちが奇妙に彼らを苛む卒中やてんかん、ひきつけ、高熱、寄生虫病のような病気に見舞われたりする。これらは無知な両親たちによって魔女たちの復讐であると考えられる。それどころか彼らの意見と空想は、無知な医者たちによって支持されるのだ。よく使われる言い習わしによって。すなわち「魔術と呪いは無知を覆い隠すものである」。しかし、実はそのような病気の原因となっているのは奇妙な言葉でもなければ魔女たちや霊でもなく、実際には有害な体液なのである。〔……〕

他方で魔女は隣人たちに不幸が見舞うことを期待している。そして彼女の願いや呪い、まじないの言葉どおりに事が時々起こるのを見る（ボダン自身が告白しているように、彼女たちの百の呪いや願いのうち効果が現れるのは二つを上まわらないという）。彼女たちは裁判官の前に呼ばれるとしかるべき審問によってその出来事が彼女の呪いや願望と隣人たちの損害と損失が一致する、いわば効果が生じるのを見るに至る。そして、彼女は（女神のように）そのような出来事を起こさせたと告白するのである。そこで彼女だけではなく、告発者も、そして裁判官もまた惑わされ騙されるのである。彼女の告白と他の状況により彼女がそれらを行っている、あるいは神自身にのみ特有の事をなすことができる（神の栄光への侮辱）と確信させられてしまうのである<sup>11</sup>。

スコットはヴァイアーの見解を取り入れ、魔女とされていた女性たちが「有害な体液」、すなわちメランコリーに支配されていると考えている。彼女らの脳がメランコリーに支配されることにより、悪魔との実際にありえない諸行為や奇跡的な業を自分がしたと妄想するので、このメランコリーの体液こそが、不可能で信じられないよう

---

<sup>11</sup> *ibid.*, pp.4-5.

なことを彼女たちが告白する原因だとスコットは断じる。魔女たちが自白を行う場合には、①過度の脅迫と拷問の使用によりそれらが引き出される場合と②自発的に自白する場合の2つの場合がある。①の場合に自白に至らせるのは、耐えがたい恐怖と苦痛であり、②の場合はメランコリーによる妄想とそれへの盲信である。スコットは①の自白は不正に引き出されたものであり、②の自白は健全でない精神に由来するものであるとして双方の無効性を主張する。さらに神学、哲学、自然科学、法学、あるいは良心をもって考察するなら、それらの自白が誤っていて不十分なものだとなると彼は述べ、以下の4点を挙げている<sup>12</sup>。①奇跡の作用は止んだのである。②すべての理性をはるかに超えた事柄を認めるいかなる理由もない。③同じ物を素手で触っておきながら、それによって毒が体から心臓へ達したのに毒殺者は苦しまないというような効果を認めることはできない。④いかなる法も不可能を認めるようなそのような自白を認めず、それらに対しては決していかなる法によっても規定がない。

これらの理由からは、スコットの鋭い観察眼と理性的な判断力を垣間見ることができる。①の理由に関して補足しておく、スコットは「奇跡を起こすことができるのは神のみ」という強い信念を持っている。そして、神はかつて天使やキリストを人々のもとに遣わしたが、我々の信仰が確かなものとなった今、もはや奇跡は必要でなくなり、起こらなくなったと繰り返し述べる。そして、魔女狩りを推進しようとする者たちが魔女に帰しているさまざまな奇跡的事象の存在をスコットはこの大前提のもとに否定した。推進派の人々が主張するような「魔女」というものは存在せず、魔女とされている老婆たちは、自分たちが呪いによって害悪をもたらした、あるいはその能力があると強制されて告白しているか、メランコリーにより想像力を損なわれてそう信じ込んでいるだけであるとスコットは考えていたのである。

## 1.2 魔術師について

スコットの描く魔女像はヴァイアーのそれとかなり共通である。しかし、魔術師 *magicien* に関して、二人の見解はかなり違ったものとなっている。メランコリックな女性たちである魔女を悪魔のまやかしの犠牲者に過ぎないとする一方で、ヴァイアーは悪魔の力を利用して自らの意志によって悪魔を呼び出す魔術師（主に男性でありエ

---

<sup>12</sup> *ibid.*, p.34.

リートである）が存在することを認めていた。ヴァイアーは魔術師を次のような者たちだと定義する。

自然の運行や法に逆らい、悪魔や他の者〔魔術師〕たち、あるいは故意に本から教授を得て、呪文を唱えること、そして既知のあるいは未知の奇妙な言葉を用いることによって、あるいは、〔魔術的な〕文字、悪魔払いの儀式、ぞっとするような呪いの言葉、あるいは式典や盛儀、あるいは意思に従っていくつかのものを結びつけることにより、人をあざむくための何らかの欺瞞、あるいは重要な事柄の遂行のためやその他の自分自身にはよいと思われるようなことをこれらの同じ方法により用いるべく不正に悪霊を呼び出そうと努める者のことを私は魔術師と呼ぶ。何らかの仮の、目立った姿をとって現れた悪霊たちが、あるいは何かの陰に隠れた彼らが、質問に対して声あるいはささやき、あるいは絵かマークによって、あるいは他の方法によって答えるようにするのである。また、私は他の似たような自然の法則を超えた事を成し遂げようとする者を「魔術師」と呼ぶ。そしてヘブル語、ギリシア語、ラテン語を話す者たちによって様々に呼ばれているが、不正で禁じられた方法で未来を迷信的に予言する者たちすべても私は同じ名前の下に含む<sup>13</sup>。

このような魔術師たちをヴァイアーは「忌むべき魔術師」と呼び、自らの意志と選択によって悪魔とかかわりその力を利用しようとする彼らの行為を非難し、彼らに対してはしばしば嫌悪感を顕にする。さらに、魔術師の処刑には賛同の意を表明していた<sup>14</sup>。

スコットも降霊術師や魔術師に対しては非難の言葉を投げかける。だが、スコットの語る魔術師像は、ヴァイアーが語ったような悪魔と結託して奇跡的な業を行う魔術師というものではない。スコットは魔術師について次のようにも語っている。

---

<sup>13</sup> J.Wier, *Histoire, disputes et discours des illusions et impostures des diables, des magiciens infames, sorciers et empoisonneurs: Des ensorcelez et demoniaques et de la guerison d'iceux: item de la punition que meritent les magiciens, les magiciens, les empoisonneurs et les sorciers* (Le tout compris en six livres), Paris, 1885, 2 vol. (réimpression de l'édition de 1579), New York, Arno Press, 1976, pp.164-165.

<sup>14</sup> *ibid.*, p.323.

実に魔術師というのは、ラテン人たちが智者 wise man と呼んだ者、ローマ人の間でのヌマ・ポンピリウスのような者のことである。ギリシア人のもとではソクラテスのような哲学者がそう呼ばれ、エジプト人たちはヘルメスのような司祭をそう呼び、カバリストたちは彼らを預言者と呼んでいた。だが、これらの者たちはこの術を区別し、その一部を忌まわしいものであると見なしていた。というのは、それらが邪で虚しく不敬神な好奇心から生み出されたものであり、天体の移動、数字、像、音、声、音楽、光、精神の状態に依拠しすぎるものだったからである。他の一部は、どの時期や季節に種をまいたり、植えたり、耕したり、刈り入れたりするのがよいかというような、多くの役立つ必要なことを教えるものであるので誉めるにたるものである。このことについては後でつまびらかにするが。だが、我々は概して区別なしにこの術全体を魔術 witchcraft の一部として断罪する<sup>15</sup>。

まず、順序が前後するが、上の引用の後半で出てくる役立つ魔術とされているもの、すなわち当時の自然魔術に対するスコットの見解をみておく。自然魔術の業の中に神は多くの神秘を隠していて、それらから人は全自然の特性、性質、叡智を学ぶだろうとスコットは述べる。そして、いちじくの木に雄牛をつなぐとおとなしくなる、天然磁石は水夫たちの役に立つといった事例を数多く挙げている。これらの事柄をスコットはカルダーノ (1501–1576 年) やポンポナツィ (1462–1525 年) らの著作から知っていた。民衆はこのような効果を魔術によって成し遂げられた神秘であると考えていたが、実際には自然魔術と呼ばれているものは自然の作用に他ならないとスコットは主張する。

ここで着目すべきなのは、この「自然魔術も魔術の一部として断罪する」とした点である。自然自体の中には目を見張るべきすばらしい実験と結果が見出され、それは大いに人間の力に対立しこれをはるかに凌駕したものであるとスコットは言う。これらにペテンと幻覚が付け加えられた時に、人間の知力と信仰と貞節が暴露され試され、もし自分たちに理解できないからといってその作用や現象を神的、あるいは超自然的、あるいは奇跡的なことだと認めるなら、魔女や教皇主義者や祈祷師やペテン師は私たちに自分たちが神々だと信じさせるだろうとも彼は言う。すなわち、自然の隠された

---

<sup>15</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed.), p.164.

力を利用する自然魔術それ自体は害がない、むしろ役に立つものであると認めるものの、それを用いる人間の意図と技術いかんではそれが悪用されうることを看取していたがゆえに、スコットは先の判断を下したのだと言えよう。

魔術師たちは人間には秘された技を習得するために、儀式魔術を行うと考えられていたが、これは先の引用の前半で語られていた事柄に関わる。数字や像などを用いて行うとされるこの儀式魔術は、霊や悪霊と交渉をもち、それらから助力を得ようとするものであり、降霊術師や祈祷師たちが行っていたものである。スコットはこれらが明らかな冒瀆（神の名を妄りに虚しく唱えるため）を含む迷信的な行為とみなしていた。彼らは魔女と同じかそれ以上の過ちを犯しているとされた。というのは、彼らは神の威光とその法に対する明らかな犯罪者であり、この王国の静寂を乱すものであるからだ。実際には、彼らは軽信な人々やペテン師、うそつきや魔女迫害者たちによって推測され強く主張されているようなことを実際には起こすことができない。だが、これらの魔術師たちは、常に学識があり、他人に欺かれるよりはむしろ他人を欺く者たちであるとスコットは言う。

ここで注目しておきたいのは、ヴァイアー同様スコットも魔術師を批判するが、その批判の理由が悪魔と結んで悪事を企てるという点にではなく、実際に何らかの悪行を遂行できるわけではないが、神を冒瀆し人々をだまそうとしているという点にあることだ。このことは、スコットの魔術 *witchcraft* の定義の中に端的に表現されている。スコットは魔術を次のように定義している。「魔術とはペテン、あるいは冒瀆のことである」<sup>16</sup>。魔女狩りを推進する者たちはもちろん、懐疑的なヴァイアーさえも悪魔と結託した魔術師が存在することを認めていた<sup>17</sup>。しかしスコットはこれを認めず、彼らの術など単なるペテンだとばっさり切り捨てたのだった。

スコットは魔術をペテン、すなわち自然に存在するものの働きを利用したいかさまだと考えていた。自然魔術と呼ばれているものも自然の力に由来する驚嘆すべき現象を引き起こすものである。すなわち、両者は自然に根をもつという点では共通である。つまり、「魔術」と言われているものは、そこに悪意やだます意図が加わればペテンとなり、有効活用すれば「自然魔術」となる自然の力でしかないとスコットは考えてい

---

<sup>16</sup> *ibid.*, p.66

<sup>17</sup> S. Anglo, «Melancholia and Witchcraft: debate between Wier, Bodin, and Scot», *Folie et deraison à la Renaissance*, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles, 1976, p.222.



たのである。

## II 聖書解釈

### 2.1 「魔女」の不在の証明

魔女狩りを推進しようとする者たちが、魔女の实在証明とその処刑を正当化するための最大の権威としていたのが聖書である。スコットは、聖書の中の魔女や魔術師について述べているとされた箇所に対してひとつずつ反論を唱えている。まず、スコットは悪魔学者が言うような「魔女」は聖書には描かれていないと以下のように述べている。

しかし、かつて『鉄槌』やボダンが語ったようないかなる種類の魔女がそこにいたのだろうか。モーセはたった4つの種類の不敬神なペテン師あるいは魔女（我々の魔女迫害論者たちが言うような妖精とダンスしたりする老女の魔女については書いていない）について語るのみである。第1のものは *Praestigiatores Pharaonis* でこれは（ヘブライのそしてその他のすべての神学者たちが結論しているように）、幻覚と早業で王の目をくらますペテン師あるいは奇術師であり、まがい物を真実の物らしく見せるのである。このことはわれわれの魔女たちが決してできることではない。第2のものは *Mecasapha* である。これは毒で殺す女のことである。第3のものは占いのさまざまな種類として用いられ、従来 *Kasam*、*Onen*、*Ob*、*Idoni* というこれらの言葉と関連している。第4のものは *Habar* で、すわなち、魔術師あるいはそれに関して巧妙であるという評判の者が、ある種の秘密の呪文をぶつぶつ唱え、重大な効果があると考えられている場合である。

これらすべてはペテン師であり、彼らの様々なやり方で人々を欺く者たちである。しかし、我々の翻訳者によって、聖書においてそれらはすべて魔女 *witches* の名で呼ばれている。それゆえ『鉄槌』とボダンの嘘の数々と我々の老婆たちの作り話がこれらの名前の下に当てはめられ、これらの言葉の意味するところを従来教えられてこなかった一般の人々にたやすく信じられているのである<sup>18</sup>。

---

<sup>18</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed.),p.62.

スコットは、英語では witchcraft と訳されているヘブル語の Chasaph を毒殺の意に解し、『出エジプト記』第 22 章で生かしておくなと命じられているのは、毒殺者のこととした。この解釈はヴァイアーが行っていたものであった<sup>19</sup>。witches と聖書の中で呼ばれているのは、イスラエルの子らの中にあつて毒で人々に害を与えていた者たちのことを指すとする点で両者は共通である。しかし、先ほどの引用に出ていた、魔術に関わるヘブル語の内容をめぐって両者に違いが表れてくる。

ヴァイアーとスコットはともに以下の 7 つの語を取り上げて論じている。それらは、①Chasaph、②Kasam、③Onen、④Nahas、⑤Habar、⑥Ob、⑦Idoni である。これらの単語の内容に関して、スコットはヴァイアーの見解を踏襲している。すなわち、①毒殺、②予言、③占い（とくに夢占い）、④鳥占い、⑤呪い、⑥霊媒、あるいはピュトンの霊（予言する霊）、⑦知るに由来し、しばしば預言者に用いられると記している。さて、先ほど見たように、スコットはこれらすべてをペテンでしかないとした。一方のヴァイアーはどうかというと、次のように述べている。すなわち、「これらの 7 つの単語のうちの最初の 5 つは人間の虚しい迷信（毒殺の行為に至るまで）に過ぎないが、人々はこれらから隠れた物事を理解したり奇跡的な行いができたりすると思っている。しかし残りの 2 つは邪悪な悪霊や悪魔憑きの実際のお告げのことを言っている」<sup>20</sup>。すなわち、ヴァイアーは悪霊がある種の予言を行うことがあると認めていたのである。一方で悪魔の人間界への介入をことごとく退けるスコットは悪霊に由来する予言などもはや認めず、他の占いともどもペテンに過ぎないと糾弾したのだ。この両者の見解の違いは、聖書におけるエンドルの巫女の事例で具体的に示されている。

## 2.2 個別事項の解釈

### ①エンドルの巫女

『サムエル記上』第 28 章でサウルが訪れた口寄せの女は、サムエルを呼び起こし、

---

<sup>19</sup> そしてこのことによって、ヴァイアーはボダンから激しく非難されることになった（平野隆文『魔女の法廷』、岩波書店、2004 年、pp.234-235 を参照）。ボダンが chasaph を眩惑の魔術を使う者だとしたのと同様に、デル・リオもこれを人を欺く目的で有害な魔術を用いる者、あるいはあらゆる種類の邪悪な魔術を用いる者を意味すると述べている。Martin del Rio, *Investigations into Magic*, P.G.Maxwell-Stuart(ed), Manchester University Press, Manchester, 2000, pp.33-34.

<sup>20</sup> J.Wier, *op.cit.*, p.161.

未来を予言したと言われている。また、『集会の書』第46章には「彼〔サムエル〕は眠りについた後でさえ予言した。すなわち、王にその最期を予告し、また地の底から声をあげ、民の不法を取りのぞくように告げた」と記されている。これらは魔術の存在を信じる者たちによって、その一部門である降霊術の存在を証明するものとみなされた。降霊術はおそらく最も古く最初の妖術だっただろうとボダンも述べ、エンドルの巫女について触れている。

ボダンは、「ある神学者たちがこれは悪魔であってサムエルではないと述べていることを私はよく知っているが、大多数はその逆の見解である」<sup>21</sup>とし、先の『集会の書』における記述と、さらにサムエルの像 (image) によって言われた台詞の中に、悪魔であつたら聞くだけでも怯える偉大な神の名前 Iehouah が5回もでてくことから、これは悪魔ではなくサムエルが降りたと考えている。

ヴァイアーもサムエルの霊かどうかの議論に2章を割いて考察している<sup>22</sup>。この件に関しては、教父たちの間にもさまざまな見解があることを示しながらも、ヴァイアーはサムエル自身が現れたのではなく、これはだます目的のために巫女に従った霊、すなわちサムエルの形をとった悪魔的な霊でしかないと述べる。ここでは、ヴァイアーはアウグスティヌスの見解を後ろ楯とする。アウグスティヌスの見解は、サムエルの霊が本当に休息から起こされたのではなく、悪魔の策略によって作り出された幻影か想像上の幻にすぎないというものであった。

さて、この事柄に対してスコットはかなり詳しく分析を行っている。結論から言ってしまうと、スコットはサムエルが呼び起こされたのでもなければ悪魔が呼び起こされたわけでもなく、サウルが巫女の腹話術というペテンに欺かれているだけだと考えていた。スコットによれば、神は生きているサムエルによって答えなかったのだから死んだサムエルによって答えることはありえない。さらにありえないのは、神が悪魔を使ってサウルに答えるということである。人々を邪悪に誘い込むのが悪魔の性質であり、この種の警告や叱責はその性質にそぐわないからだと言っている。また、この予言の信憑性自体にも問題点があるとスコットは指摘する。なぜなら「明日、あなたとあなたの子らは私と共にある」すなわち死んでいると予言されたが、戦いが行

---

<sup>21</sup> J.Bodin, *De la démonomanie des sorciers*, Paris, Jaques du Puys, 1580, (réédition de 1587), Paris, Gutenberg Reprints, 1979, pp.77R-78L.

<sup>22</sup> J.Weyer, *op.cit.*, pp.215-226.

われたのは翌日でもなければ彼の息子たちすべてが殺されたわけでもなく、さらに自殺した後の邪悪なサウルが善良なサムエルと共にはないからである<sup>23</sup>。

スコットは続けて次のようにも述べる。「[……] ここで私はサムエルがサウルに現れたのではないとする法 (Canon.26.quæst.cap.5.nec mirum.) を忘れまい。だが、歴史家たちはサウル的心情とサムエルの状況、そして発言されたり見られたりしたことを述べ、それらが真実か偽りかを顧みることはないのである。さらに言えば、物語のありのままの言葉を信じるのは人間にとっては重大な罪である」。

この最後の一言には、聖書や古典の記述を自動的に証拠として用いていたボダンをはじめとした当時の悪魔学者たちへの痛烈な批判が込められているように思われる。スコットは別の箇所でも、「魔女の力の実在を示すかのような古典を、読者の大部分が単なるお話でしかないと認めるだろうことを私は疑わない」、「多くの学識ある私の論敵たちは熱心にこれらを証拠に挙げているのだが、私には彼らの判断力が欠如しているとしか考えられない」<sup>24</sup>と述べている。

書かれたことを鵜呑みにしないスコットは、いろいろな事情を考慮した上で、エンドルの巫女はすっかりサウルをだましたに違いないと結論する。スコットは巫女のペテンを以下のように推測している。サウルがサムエルを呼び出してほしいと彼女に話し掛けたとき、彼女は彼の前から離れ、押入れに入った。そこにはおそらく彼女の仲間がいた。すなわち邪悪で悪賢い祭司もあり、サウルを愚か者のようにドアに立たせ、答えを聞かせた。だが、そのだましの操作とそのペテンは見せなかった。彼女はもっともらしい祈祷の言葉を唱え、霊と交信しているように装った<sup>25</sup>。

聖書の記述にそのまま信を置いてサムエルの霊が呼び起こされたとするボダンの見解とスコットのこのような考察は対照的なものである。また、サムエルではなくて悪魔の作用による幻覚だとしたヴァイアーの意見ともスコットの見解は相容れないものである。ボダンのように考えるなら、降霊術による人間と霊の交信、さらには人間世界への霊の介入が当然可能なことと想定される。他方のヴァイアーのように幻覚説をとるならば、人間の想像に働きかける悪魔の力がア・プリオリのものとなるので、悪魔が人間に作用するということを認めることになってしまう。スコットは、すべて

---

<sup>23</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed.),p.85.

<sup>24</sup> *ibid.*,p.130.

<sup>25</sup> *ibid.*,p.83.

を巫女のペテンであるとした。こうして、ここで悪霊の介入の一切を認めなかったことは特記に値する。

## ②ファラオの魔術師

ファラオの魔術師たちがモーセの奇跡を模倣してファラオの心を頑なにするというくだり（『出エジプト』7、8）は、魔術の存在を説く際に重要な出典とされてきた。例えば、ファラオの魔術師たちの魔術をジェームズ1世やボダンは何ら検討を加えることなく、実際に行われた魔術としてとらえていた<sup>26</sup>。また、ヴァイアーはあいまいな見方をしている。

ヴァイアーは、モーセの行ったのと同じことがファラオの魔術師の呪文によってなされたという記述に関してもっと深く洞察するなら、その変成作用は実際にモーセがやってのけたものとは違ふと気づくだろう、それは王の眼前に描き出された幻影に過ぎないと述べる。さらに物理的な杖が生き物に変化するということがまったく理にかなっていないのは明白だとした。しかしながら、「もし、この杖からの変化が本物であるなら、悪魔の助力によってなされたのにちがいない」<sup>27</sup>とも記している点で論敵たちに付け入る隙を与えてしまっていると言えるだろう。スコットはこの事例においても「魔術」がペテンに過ぎないと主張する。ファラオの魔術師に関する彼の見解は以下のようなものである。

だが、モーセが聖霊の力によってしたようなことを彼ら（魔術師）自身で、あるいは地獄のあらゆる悪魔の力を借りてできると断言することはまったく不敬神である。もし誰かが反論して、ファラオの魔術師たちが彼らの術によってしたように、我々の魔女たちも言葉や呪文でそのような芸当を行うことができると言うなら、私はこれを否定する。それに、全世界は決してこれを証明することなどできないだろう。彼らがしたことは公然となされたことで、我々の魔女や祈祷師たちが決して何もできないのと同様に、これらの者たちもした〔と見せかけた〕ことを〔実際には〕することができない。しかも（カルヴァンが言っているように『キリスト教綱要』I-8）、彼らはペテン師でしかない。多くの者たちが推測しているようなこともまた彼らはすることが

---

<sup>26</sup> King James I of England, *op.cit.*, p.5. J.Bodin, *op.cit.*, Preface.

<sup>27</sup> J.Weyer, *op.cit.*, p.208.

できない。クレメンスが言っているように、これらの魔術師たちはこれらの驚異を実際にしているというよりは、そのように見せかけたのである。さらに、いかさまでしかない行為をうまく利用したなら、これは我々の魔女ができること以上であると私は言おう。というのは、魔術（エラストゥス自身も議論の成り行きの中で認めているが）は、老婆たちのお話にすぎないのだ。もし魔術師たちの蛇が本物だったなら、それは杖の中から変成される必要があった。そしてそこには神の二重の働きがあるのだ。すなわち、ひとつの実体を創って消滅させ、また別のものを創造することである。これらの働きは悪魔の能力を超えている。というのも、彼〔悪魔〕は体をもつものを体のないものにすることもできなければ、体のあるものを体のないものにすることもできないからだ。何かを無にすること、無から何かを、そして相反するものを作り出すような事に関しても、我々は否定する。彼らは一本の髪の毛を白くも黒くもすることはできない。もしファラオの魔術師たちが突然本物の蛙を作り出すことができたなら、なぜ彼らはそれらをもとの状態に追い払うことができなかったのだろうか。彼らが蛙を害することができなかったのに、なぜ我々は彼らがそれらを作り出したと信ずるべきだろう。あるいは、我々の魔女たちは彼らをまねすることさえできないというのに、言葉や祈願で牛や他の生き物を殺すことができるだろうか<sup>28</sup>。

このように、スコットはファラオの魔術師を驚異が起こせると見せかけている奇術師、あるいはペテン師に過ぎないと考えていた。神のみが可能である創造の業を魔術師たちが行うことなどありえず、悪魔の力を借りたとしても不可能なことだとスコットは主張する。これらの魔術師たちでさえ実際に驚異を行うことができないのだから、物乞いの気違い老婆たちに同様のことができるはずがないということが含意されている。このように、ファラオの魔術師たちが実際に魔術を実践することができ、それゆえ魔女たちにも魔術が可能だと演繹する魔女狩り推進者と彼は真っ向から対立したのだった。

### ③ヨブの受難

『ヨブ記』において、神はサタンを通じて義人ヨブに残酷な仕打ちを与えて試練に

---

<sup>28</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed), p.180.

かけた。この物語から、ボダンが悪魔には神の許しの下で数々の悪行をなすことが可能なので、悪魔の力を借りた魔女たちも同様のことを行うことができると主張していた。ボダンは「神の御意志は理解不能であり、神が悪魔に与えた力は人間には計り知れないものだ。『ヨブ記』でも言われているように、この世においては悪魔の力に対抗しうるほどの強大な力をもつ者は存在しない」<sup>29</sup>と述べ、サタンを魔女という手先を使って人類を滅ぼそうとする恐るべき敵として描いていた。

ヴァイアーも神が許すとき、悪魔は人間の体のさまざまな部分を襲ったり、奇妙で超自然的な仕方で人間や家畜を害したりすることができると述べ、ヨブの場合を例として挙げている<sup>30</sup>。とはいえ、ヨブは魔術によって苦しめられたのでもなければ、ここには悪霊と共謀した魔女など登場していない。悪魔は十分な能力を持っているので、神の許しさえあれば、自分自身のみによってすみやかに悪事を成し遂げることができるとヴァイアーは言う。「神の許しの下で悪事を行う悪魔」とメランコリーの老婆たちである魔女とは関係がないとしたヴァイアーであるが、彼も悪魔の力をそれなりのものだと見積もっていた節がある。

神はしばしば御自身の計画により、そして私たちの当然受けるべき報いのために、あらゆる種類の人間に対してペテンや暴虐な行為を行うことを悪魔に許している。しかし、それでも神はすべてのことを悪魔の思いどおりにさせることもなければ、悪魔が自分の目的すべてを追求することを許すわけでもなければ、無制限の完全な許可を与えているわけでもない。さもなければ、私たちは一瞬にして悪魔に殺されてすべて滅びることだろう<sup>31</sup>。

スコットも『ヨブ記』に関して一章を割いている。ヴァイアーが主張したのと同様に、ここに魔女という言葉など一言も書いてないではないか、ヨブは一連の試練を「与えたのは神だ」と言っており、「神ではなく悪魔か魔女がもたらした」などとは言っていないではないかとスコットは述べる。彼はカルヴァンの解釈を用いて以下のように言う。

---

<sup>29</sup> J.Bodin, *op.cit.*, p.115L.

<sup>30</sup> J.Wier, *op.cit.*, p.486.

<sup>31</sup> *ibid.*, p.140.

カルヴァンは言った。神が行うのではなく神がサタンにそれをするがままにさせていると私たちが言うならば、私たちは神の栄光と全能性をひどく貶めることになる。これは神の正義を嘲ることである（と彼は言う）。これはたいそう愚かしい主張であるから、もしロバが話せたとしたら、これよりは賢く話すだろう。というのは、世俗の裁判官は死刑執行人に「あなたにこの有罪人を絞首することをゆだねる」とは言わずそうするように命じる。しかし、魔女の全能を主張する者たちは言う。「いかに実際に明らかに悪魔がヨブを試し、苦しめたのかわからないのか」と。私は第一に答えよう。この出来事のいかなる場面においても肉体をまとった、あるいは可視の悪魔は明示されていないし、目撃されてもいない。第二に、これを行ったのは神の手である。第三に、人間の体と悪魔の体には交流はないので、この場合いかなる協議も実行も彼らの間ではありえない<sup>32</sup>。

ヨブの出来事のような場合、悪魔は神の意志の道具として働いているだけであり、自らの意思によるわけではない。したがって、神がしているのではなく、〔神は〕悪魔がするのを許していると言うなら、それは無知で不敬神なことだともスコットは言う。彼はさらに、「私としてはこの物語の真実性を否定するわけではないが、実に告白せねばならないのだが、神と悪魔とヨブのあいだには彼ら〔魔女撲滅論者〕が想像しているようないかなる実際の出来事もなかった、魔女撲滅論者たちが考えだし主張しているような現実の存在もやり取りもなかったと考えている」<sup>33</sup>と述べた。

度合いの差こそあれ、ボダンやヴァイアーにおいては「神の許し」という足かせがつけられているものの、悪魔はその力のある程度は自由に行使できる存在として考えられていた。しかし、スコットにおいて悪魔は単なる神の道具であり、そこに主体性はみじんも感じられない。ヴァイアーは『ヨブ記』における魔女の不在を指摘したが、スコットはこれに加えてこの物語の中の出来事が実際にはなかったとさえ言う。悪魔の力の現実性を論証するにあたって証拠とされてきたヨブの物語をこのように解釈することにより、スコットはこれを突き崩そうとしたのである。

---

<sup>32</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers (ed), pp.60-61.

<sup>33</sup> *ibid.*, p.61



### III 超自然力の追放

#### 3.1 病いのメタファーへと格下げされる悪魔

前章の聖書解釈からは、スコットの悪魔についての認識がボダンやヴァイアーのそれとかなり隔たったものであったことが証明された。シュブレンガーやボダンはもちろんのこと、ヴァイアーさえも悪魔とその力については詳述していたが、『魔術の暴露』において、悪魔は非常に影の薄い存在となっている。

『魔術の暴露』に付け加えられた 33 章からなる「悪魔と霊についての言説」において、スコットは悪魔に関する自身の見解を示している。第 1 章の冒頭で悪魔や霊についての問題以上に取り扱いの難しい問題はないと指摘しながらも、スコットはプラトン、プセロス、ディオニュシオス・アレオパギテスらの悪魔や霊に関する議論を紹介した上で、彼自身の見解を述べている。まず、スコットはいかなる悪魔も霊もないとするサドカイ派やペリパトス派の主張を斥ける。スコットは、悪魔や霊の存在を認めている。だが、それらの存在の形態は霊的な在り様であり、形を伴わないものとした。したがって霊体である悪魔と肉の存在である人間のあいだではいかなる契約も結ばれない<sup>34</sup>。これらの霊の働きについては、神が栄光のために命じたこと、神が喜ぶことであればできるとした。

では、悪魔や霊たちは実際にどのようなことを行くとスコットは考えていたのだろうか。悪魔が人や動物の姿で人々の前に現れるという見解に対して、彼は以下のように反論している。

魔女迫害者たちは、彼ら自身の大半によって告白されているのであるが、彼〔悪魔〕は人間の精神の思考を知っているわけではないので、(私が思うに) 彼はあのような巨大で肉体的な形をとって、魔女たちの前でそうしていると言われているように、しばしば正直で信じやすい人々の前に現れる。このことをあなたは十分な証拠によって証明されたのを決して聞くことがないだろう。というのは、実は悪魔は精神の中に入り

---

<sup>34</sup> *ibid.*, pp.25-26. ヴァイアーも同じ見解である。

込んでいるのであり、この方法によって人間を混乱させようとしているからである<sup>35</sup>。

このように悪魔による攻撃は精神的なものだとスコットは考えている。彼は「私たちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものだ」(『2 エフェソ』6: 11,12) というパウロの言葉を引用しながら、まるでライオンが吠えながら餌食を探し回るかのように、信仰において頑なに反抗する者を、悪魔は探しているのだと述べる。だが、もちろんこれは肉体的な歯によってではない<sup>36</sup>。さらに、このような霊的な存在である悪魔のことは霊的なものによってのみ識別されるべきで、肉の存在である人間は霊の事柄を識別することはできないと述べる。結局のところ、スコットは悪魔や霊についての問題を人間がどうこう議論してもしかたがないことだと見なしているのである<sup>37</sup>。

スコットは悪魔が霊的な存在であり、人間の精神に作用を及ぼすことはあるとした。だが、悪魔はその領域においても、居場所を失いつつあった。悪魔は病気にその座を奪われているからである。スコットは、「福音書の中で霊にとりつかれていると言われている者たちについてだが、多くの場所で彼が悪魔にとりつかれている、あるいは彼が精神異常である、あるいは狂気——最近ではメランコリーに由来すると言われているが——に陥っていると言うことに違いはない、すなわち同じことだ」と述べている。つまり、スコットは悪魔が病気を指すものだと考えている。彼は続けて次のようにも言う。

しかし、もし今精神異常であるすべての者が本物の悪魔にとりつかれているのだとしても、悪魔は薬によって追い出されるべきだと考えられるであろう。ところで、カナーンの女が「私の娘は悪魔に苛まれている」と言うとき、娘が何らかの病気で苦しんでいると彼女が言おうとしたこと以外が推測されると今日誰が言うだろうか。実際に、我々は邪悪な者に対して「彼の中には悪魔がいる」と言う、正直に言う。しかし

---

<sup>35</sup> *ibid.*, p.7.

<sup>36</sup> R.Scot, *op.cit.*, Nicholson(ed.), pp.426-427.

<sup>37</sup> 証明が不可能な現象を形而上の世界に関する議論におけるさまざまな権威を用いて肯定したがダンの態度とは対照的である。この点に関しては、A.Petit, «Un système de prevue empirico-métaphysique: Jean Bodin et la sorcellerie démoniaque», *Revue européenne des sciences sociales*, t.XXX1992, n.93, pp.39-78.

我々はこれによって彼の腹の中に本物の悪魔がいることを意味しない。だが、もしそうなら、どんな形で悪魔がとりついた者の中に留まっているのか私は不思議に思う。彼はひとつの形の中に体を、その精神を別の精神の中に入れるというのだろうか。もし彼らが彼〔悪魔〕を靈的で不可視だと認めるなら、私は彼らに同意する。

前述のカナーンの女が、彼女の娘が実際には何らかの病気に苦しめられていることを言い表していたと考える者たちがいる。なぜなら、＜悪魔が追い払われ＞と書かれる代わりに、それどころかまったく同じ時に、＜彼女の娘は癒された＞と書かれているからだ。『マタイによる福音書』の第12章では以下のように言われている。悪魔にとりつかれて目が見えず口のきけない人がキリストのもとに連れてこられた。キリストは彼を癒した。そして目が見えず口のきけなかった人は、話すことも見ることもできるようになった。だが、癒されて話すことと見ることができるようにされたのはその男であって悪魔ではない。したがって、このような病んでいる者たちは精神異常の者たちと同様に、しばしば悪魔にとりつかれていると言われるのである<sup>38</sup>。

この引用からは、スコットは悪魔や霊は存在するとしつつも、それらを実在するものというよりはむしろ病のメタファーとして理解していることが分かる。また、別の箇所でも、「聖書においては我々の理解を助けるためにしばしば靈的なものは実体的に肉体的に表現されることがあるが、これらは実際にそうであるというよりは、喩えかメタファーによってそう言い表されているのだ」とも述べている<sup>39</sup>。

ヴァイアーとボダン、そしてスコットの悪魔学について考察したアングロは、スコットにとってはもはや悪魔も魔術も存在せず、悪魔は人間の理解を超えた謎や病気のメタファーにすぎないと断言した<sup>40</sup>。スコットをほぼ完ぺきな啓蒙された精神の持ち主と見るアングロのこの見解をエステスは批判し<sup>41</sup>、スコットは悪霊の存在を否定

<sup>38</sup> R.Scot, *op.cit.*, Nicholson(ed), p.430.

<sup>39</sup> カルヴァンが『キリスト教綱要』(I-14.14)において、サタンや悪魔が単数で呼ばれているとき、それによって正義の王国に逆らう邪悪な力を意味すること、そして聖書において多くの悪魔の名が挙げられているところから、我々は無限の敵の大群と戦わねばならないと教えられる、と説いていることをスコットは紹介している。R.Scot, *op.cit.*, Nicholson(ed.), p.432.

<sup>40</sup> S.Anglo, «Melancholia and Witchcraft: the debate between Wier, Bodin, and Scot», *Folie et deraison à la Renaissance*, 1976, p.222.

<sup>41</sup> L. L.Estes, «Reginald Scot and his *Discoverie of Witchcraft*: Religion and Science in the Opposition to the European Witch Craze», *Church History*, 1983, pp.446-448

することなくその実体的な活動を制限したエラスムスと見解を等しくしていると主張した。モデスティンも述べているように<sup>42</sup>、アングロとエステスどちらの説がより妥当であるかを問うよりも、スコットが「悪魔は肉体的な存在ではない」と繰り返し、さらには悪魔をメタファーと解釈することにより、形而下の世界における悪魔の影響力を激減させた点に注目すべきである。

スコットはこれ以上厄介な領域に踏み込まない賢明さをもち合わせており、「悪魔や霊の本性については、聖書においてもこのように定まっていらないので、我々はいと高き霊、すなわち諸霊の王者である聖霊によって我々にもたらされた言葉と意味を忠実に信じることで満足し、自己形成に努めるべきである」と述べた<sup>43</sup>。前述のように、悪魔は霊的なものとして存在すると認められてはいるものの、スコットにおいてはもはや悪魔は実在する脅威ではなく、むしろメタファーにすぎないものへとシフトしていると言えよう。

### 3.2 奇跡の終焉、カトリック批判

魔女たちの驚異的な行いが現実のものではないことを訴えるに際して、スコットは奇跡を行うことができるのは神だけであると繰り返し主張した。神だけが命と存在を与えることができる者であり、可視のものも不可視のものもすべてが彼によって作られるとスコットは述べる<sup>44</sup>。スコットによれば、奇跡の真の目的は、人々にキリストを信仰する気にさせることにある。神はメシアへの人々の信仰を強めるために、死者をよみがえらせる、盲人の目を開き、口のきけない人に話す力を与える、あらゆる病を癒すといった奇跡を人々に見せることを喜んでいた。そして、キリストの到来に際しても、信仰を確かなものにするために、使徒たちには特別な恩寵が授けられた。だが、我々の信仰が確かなものとなった今、もはや神が奇跡を見せる必要はなくなったとスコットは言う。それゆえ「今でもそれら〔奇跡〕を求めることは不敬神な態度である。それにもかかわらず（もし明記するなら）、教皇主義者たちによってこのことについては大いに論じられた。彼らの偽りの伝説のなかに現れているように。だが、実はわたしたちの奇跡〔そう考えられている〕は、最も一般にごまかしにすぎない。そ

---

<sup>42</sup> George Modestin, *op.cit.*, p.144.

<sup>43</sup> R.Scot, *op.cit.*, Nicholson(ed), pp.431-432.

<sup>44</sup> R.Scot, *op.cit.*, M.Sammers(ed), p. 87.

して特に司祭たちのごまかしである。このことに関しては、私は無数の引用を行うことができる」<sup>45</sup>。

カトリックへの攻撃的な言葉は『魔術の暴露』において散見される。まず、スコットはカトリック教徒たちが行う聖体拝領を痛烈に批判する。第11の書の第3章「人食い人種の残虐性、ユダヤ人や異教徒の暴虐を超えるカトリックの犠牲について」においてスコットは、次のように述べている。

なぜなら、彼ら〔カトリックの司祭たち〕はキリストを犠牲にすることを引き受けているからである。彼らの暴虐がもっとも明らかなのは、彼らがキリストを一度殺すだけでは満足せず、日々刻々彼を新しい死で苦しめることにある。実に彼らは彼の人としての実体を自分たちの肉のものである手で引き裂きそれを小さな塊にし、そして体の外側にある歯で彼の肉と骨をかんで食べるという神と人間の本性に逆らった、そして「骨の一本も損なわれることがないように」〔傍注では『詩篇』34:20 となっているが、実際は30:21〕という預言の言葉に反することを恥知らずにも断言している。最後に、彼らの犠牲の終わりには（彼らが言うように）、彼らは彼〔キリスト〕を生のまま食べ尽くし、彼らの腹の中に彼の器官や部分をすべて飲み下す。そして最後に彼らはその日食り食ったすべての残留物のある場所に彼を運ぶのである。そして、まさにこの野蛮な不敬神はすべての他の者たちを超えているのである。というのは、すべての異教徒たちは彼らが神聖視していた犠牲を畏敬を持って食べていたのだから<sup>46</sup>。

聖体拝領の他にもさまざまなカトリックの宗教行為は批判されている。使徒たちや初期教会の人々の中には悪霊を避けるために『ヨハネによる福音書』や神の子羊の像を持ち歩く者などいなければ、カトリックのルールに則って、悪霊から自由になるために家の四隅や屋根の上に魔術の物質を探して燃やそうとする者などいなかったし、これこれの節や聖人への祈りをこれこれの時間に恵みを得るために行う者などもいなかった。また、彼らはいかなるそのような仕業をする老婆について語ることもなかった。キリストは決して聖水や十字架の使用を命じることはなかった、とも述べられている。

---

<sup>45</sup> *ibid.*, p.86.

<sup>46</sup> *ibid.*, p.109.

カトリック教徒の用いる聖水や祈祷にはまったく効果はなく、効果があるように見える時には何らかのペテンが働いているとスコットは言う。さらに「すべてのプロテスタント信者は、カトリックのまじない、祈り、祝福の言葉は効果のないものであり、民衆を盲目にし、聖職者を富ませるためだけの道具である小細工だと感知している」<sup>47</sup>と述べ、カトリックの祈祷師たちと魔術師たちの違いはカトリックがおおっぴらに行い、魔術師は隠れて行うという点にしかないと断じてもいる。

これらのカトリックへの批判は確かにプロテスタントであるスコットの立場からすれば当然のものであるが、ここでは以下の点を指摘しておきたい。カトリックの祈祷や儀式になんら効力を認めないスコットは、魔女や魔術師が行うとされた呪いや驚異的な業を同時に斥けている。「カトリックが聖水や祈りを用いて行う祈祷にも効果がないというのに、魔女や祈祷師が行う行為にはより効果があると言うのだろうか」<sup>48</sup>と彼は言う。こうしてカトリックの行いも魔女たちの行いもペテンであるとスコットは一蹴した。奇跡を起こせるのは神だけだという強い信仰がその背景にあることは言うまでもないだろう。

#### おわりに

ヴァイアーの説を取り入れつつも己の理性に照らし合わせ、ファラオの魔術師やエンドルの巫女の術をペテンにすぎないと喝破し、人間の動物への変身を幻覚だと述べるスコットに、私たちは近代的精神の持ち主という呼び名を与えることも可能かもしれない。実際に、この側面のみが強調されることもあった。だが、彼の中にあっては、神とその力への絶対的な信仰（プロテスタント的）が基盤となっている。聖書に書かれている事柄を非常に重視するのは言うまでもないが、それを鵜呑みにすることなく合理的な分析をすることに彼は長けていた。そして、このような精神を支えていたのが超越的な神への絶対的な信仰だったのではないだろうか。

奇跡を起こせるのは神だけであり、その奇跡ももはや終わったという強い信念に基づき、スコットは人間が悪魔と結託して魔術を行う可能性を否定した。さらに『魔術の暴露』の中で、悪魔の力は限界までそぎ落とされた。あるいはもはや彼にとって悪魔の影響力は無に等しかつたとさえ言えるかもしれない。同時代を代表する知識人で

---

<sup>47</sup> *ibid.*, p.280.

<sup>48</sup> *ibid.*, p.261.

あるボダンらが悪魔の脅威におびえ切ってその手下と踏んだ魔女の数を減らすべきだと躍起になっていたのとはきわめて対照的である。

キース・トマスが『宗教と魔術の衰退』で述べたように、迷信や魔術的信仰との決別は科学革命の所産である知的基礎、機械論的哲学あつてのことかもしれない<sup>49</sup>。とはいえ、神への信仰と合理主義という2本の柱に支えられたスコットは、カルヴァン説に基づくことによって自然と超自然を区別し、悪魔を自然界から追放した。こうした考え方は16、17世紀の新教国ではかなり一般化していたのではないと思われる。スコットの確信、すなわち神という超越者の配慮に基づいたこの世界のすべての出来事には自然の原因があるという確信は、即世間を動かすことはなかったが、王政復古期において魔女懷疑論者たちの論証の重要な拠り所のひとつとされたのであった<sup>50</sup>。

---

<sup>49</sup> キース・トマス, 前掲書, p.849,p.953.

<sup>50</sup> G.Tourney, 《The physician and witchcraft in Restoration England》, *Medical History*, 1972, vol.16(2), p.154. トゥルネーは魔術の衰退は複合要因によると述べ、スコットやヴァイアーらの著作の再強調の他、ポップス、デカルト、ロックらの哲学、魔女の自白の有効性をめぐる裁判官の関心、ベッカーに見られるようなよりリベラルな神学などからの影響を反映していると述べている。

また、トマスによれば、スコットらに負う首尾一貫したイデオロギーに基づきウィッチクラフトそのものの可能性を否定する姿勢よりも、何かの特定の訴訟事件でウィッチクラフトが働いていることを証明することが論理的に困難だという意識が高まり、それが当時の人々に影響を与えたという(キース・トマス, 前掲書, p.843).

魔女狩り衰退期の思想的展開に関しては、今後の課題としたい。